

# 「日本の中の異文化」とは何かーデジタルネイティブの時代

佐々木 隆

## プロローグ

日本異文化研究会が発行する会誌は『日本の中の異文化』である。今回はこの会誌名をテーマとして「日本の中の異文化」とは何かを考察したい。<sup>(1)</sup> 奇しくも筆者が他に所属する日本英語文化学会の学会誌は『異文化の諸相』であり、共に「異文化」を冠にしている。これは視点を向けるべき方向が国内であるか、あるいは海外であるかという単純なことではない。今回中心に取り上げたいことは世代間による文化の捉え方の相違である。具体的に言えば、「伝統文化と現代文化」あるいは「若者文化とおとな文化」ということになろうか。

## 1 「異文化」とは何か

一般的に「異文化」とはどう定義されるのであろうか。新村出編『広辞苑』（第6版）では「生活様式や宗教などが（自分の生活圏と）異なる文化」<sup>(2)</sup>と定義されている。英語では“different culture”となる。他の表現としては“cross culture, interculture”なども使用されることがある。異文化＝外国文化ではなく、異文化のひとつに外国文化があるということになる。『広辞苑』の定義で最も注目すべきことは「自分の生活圏と異なる文化」ということになる。ここに「日本の中の異文化」という条件を加えると次のようなことが考えらるだろう。

- 1 地域性による文化の相違。文化の画一性を求める一方、ローカリゼーションは無視することできない。言語、食文化、習慣の違いなどがよく論じられている。
- 2 地域性によるものではなく、世代間による文化受容の差異。

本論で取り上げたいのは後者である。中でも第1にインターネット関係、第2に伝統文化について取り上げたい。

## 2 「日本の中の異文化」とは何か

### 2 デジタルネイティブとデジタルイミгранト

第1のインターネット関係では特に日本でも1992年以降のインターネット商用化に伴い、インターネット時代を迎えることになるが、所謂デジタルネイティブと呼ばれる世代はおとな文化で生活している年齢層の人々にとってはまさに異文化の世代とも言ってもよいかもしいない。デジタルネイティブはマーク・プレンスキー(Marc Prensky, 1946-)が *On the Horizon* (2001) に掲載した “Digital Natives, Digital Immigrants”<sup>(3)</sup> で脚光を浴びたとされている。

What should we call these "new" students of today? Some refer to them as the N- [for digital] - gen. But the most useful designation I have found for them is **Digital Natives**. Our students today are all "native speakers" of the digital language of computers, video games and the Internet.

訳 今日こうした「新しい」学生たちを何と呼ぶべきか。彼らをN世代と呼ぶ人達もいる。しかし、彼らのために私が見つけた最も有用な呼び名は「デジタルネイティブ」だ。今日の学生達すべてがコンピュータ、テレビゲーム、インターネットのデジタル言語のネイティブスピーカーなのだ。

そして続けて次のような記述がある。

So what does that make the rest of us? Those of us who were not born into the digital world but have, at some later point in our lives, become fascinated by and adopted many of most aspects of the new technology are, and always will be compared to them, **Digital immigrants**.

訳 それでその他の我々を何と呼べばよいかどうか。デジタル世界に生まれて来なかったが、人生においてある後半の時点で新しい技術の大部分に魅せられ、それらの多くを採用するようになり、いつも彼らと比較されるようになるだろう人々はデジ

タルイミгранトである。

この論文は 2001 年に書かれたものであるが、日本でもインターネットの商用化が 1992 年に始まり、この周辺で生まれた世代は 2013 年段階ではすでに 20 歳前後になっている。また、1983 年のファミコン誕生を起点にすれば、30 歳前後の世代まで広がることになる。

インターネット、スマートホン、PC（タブレット型を含む）を活用し、blog、twitter、facebook に代表される SNS（Social Network System）を使いこなす世代とデジタルツールに対して腰が引けている世代では生活様式や価値観すら異なってくるのは必然的な結果だろう。時間、空間のイメージも大きく異なることは言うまでもなく、コミュニケーションの方法が大きく変わってきているということだ。デジタルネイティブが最も活用する SNS やスマートホンの発信は対面式のコミュニケーションではない。（SKYPE などもあるが）この結果、よく言われるコミュニケーション能力不足という社会問題化されるまでになっているのは周知の通りだ。デジタルネイティブはダイレクトに自分が求める人に連絡が取れる手段を活用すると共に、不特定多数の人達に自分の意見等を発信することができる。若者にとっては電話を取り次いでもらうという機会は極めて少なくなっており、そこから学ぶ敬意表現についても十分に身に付ける機会が極端に少なくなっていると言ってよいだろう。情報を集めることに長けているデジタルネイティブであるが、情報過多のネット上ではその情報に翻弄されることもしばしばである。ネット上のものをリアルに感じ過ぎ、安易にこれを信用してしまう傾向にもある。こうしたメールや SNS をメインにコミュニケーションをとるデジタルネイティブと対面コミュニケーションをメインとするデジタルイミгранトでは、コミュニケーションの本質が伝達にあるのか、face to faceにあるのかでも大きく異なる。こうした相違はかつての隣近所を強く意識した長屋住まい、マンション暮らしを彷彿とさせるものがある。隣人のことが全く分からない現代社会はまさに顔のない社会である。また、短い文章によるコミュニケーションと発話によるコミュニケーションとで

#### 4 「日本の中の異文化」とは何か

は表現方法等が大きな違いが生じてくる。こうした世代が同じ組織内で仕事等すれば、メールを見た見ない、挨拶の有無等で軋轢が生じるのは当然の事とも言える。SNS 依存症といった人の心理状況にも大きな影響を与えている。

### 3 若者にとっての伝統文化

2013年4月2日から新しい歌舞伎座の柿落とし公演が始まった。筆者も初日ではなかったが新歌舞伎座の柿落とし公演を観た。観客の多くがいわゆる年輩者であり、若者は以前よりも若干多いような印象を受けたが、圧倒的に少ないことに変わりはない。歌舞伎は決まり事が多く、これを理解していない場合には日本人であっても深く堪能することはできないだろう。これはまさしくエドワード・T・ホール(Edward T. Hall, 1914-2009)の言う「ハイ・コンテクスト」(high context)と「ロー・コンテクスト」(low context)の問題ということになる。外国人にとって日本文化がわかりにくいのは一般的に暗黙の了解として認知されることが多く、さらにそれが前提として進められるからと言われている。「空気を読む」「場を読む」といった言葉に頼らない状況判断が優先する「ハイ・コンテクスト」、できるだけ多くの言葉で伝えるのが「ロー・コンテクスト」と言うことにもなる。

この考え方は外国人が日本文化を理解する時にだけに当てはまるだけでなく、世代間についても当てはまることだ。この意味で言えば、『文化と文化をつなぐ』(2012)の中の浜名恵美の指摘は重要な意味を持つようになる。

実は、日本の多くの観客には、能、狂言、文楽、歌舞伎のほう  
がシェイクスピアよりも異文化であるという皮肉な現実がある<sup>(3)</sup>

これに世代を加えて考えるとすれば、西洋文化に慣れてしまった若者ほど一般的には日本の伝統芸能離れが進むということになる。これは単なる言葉の問題や「ハイ・コンテクスト」と「ロー・コンテクスト」も越え、全くの異文化となるだろう。西洋演劇は台詞劇が中心となり、日本

の歌舞伎に代表される伝統芸能は「曲」の考え方が強く、音楽的な要素が強い傾向にある。

日本人であるからと言って歌舞伎・能・狂言を専門劇場や能楽堂などで観劇したことのある人は決して多くない。『竹取物語』『今昔物語集』『源氏物語』『枕草子』『徒然草』等をたとえそれが現代語訳であったとしても通して読んだことのある人は多いとは言えないだろう。中学・高等学校の古典の授業でほんの数ページを読んだ程度であろう。また、夏目漱石や森鷗外の作品も国語総合の教科書ではほとんど取り扱われない傾向だ。国際化、グローバル化という言葉に踊らされて、外国重視という偏重振りには警鐘を鳴らすべき時期が来ているとは言えないだろうか。「日本人の日本知らず」現象がむしろ蔓延化している傾向にあると言っても過言ではない。ここにもうひとつ若者が伝統文化に触れる機会を遠ざけている要因に費用の問題がある。一般に映画や漫才、小劇団の入場料と比較すると、歌舞伎などの伝統芸能をいざ観ようとした時、高額な入場料は大きな障害となる。しかし、その反面、デジタルツールやインターネットを通してダウンロード等にかかる費用には若者は比較的寛容な面もあるが、消費行動の価値基準によるものだ。

#### 4 情報過多と価値観

既存のもの、既成概念に対して疑問をほとんど持たない世代は、「前からそうだったから」「昔からそうだったから」という理由で物事を推し進める傾向にある。これに対して、若者の既成概念に取られない考え方は異文化世代で育っていることが背景にある。インターネット時代到来により情報過多の時代に育った若者はインターネットでの情報やそこで紹介されているもの、また、twitter や facebook での情報に左右されることがある。ネット上にリアルさを求めるあまり、現実と虚構の区別がつかなくなっているからだ。デジタルネイティブとデジタルイミグラントが会社等の組織の中で一緒に仕事をすれば、トラブルが起きて当たり前だろう。見えないものにも信頼を置く世代と見えないものに信頼をおけない世代では当然価値観は異なる。しかし、いつまでも対立し

## 6 「日本の中の異文化」とは何か

ている状況でもない。これはかつてサミュエル・ハンチントン『文明の衝突』(Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, 1996)でも予言されていたようにキリスト教文化圏とイスラム教文化圏は対立から共生という考え方が必要であるという主張に類似している。グローバリゼーションは画一性が求められるため、そこには対立が生まれるかもしれない。そこで登場したのがグローカリゼーション(glocalization)という考え方だ。「グローカリゼーション」はもともと「反グローバリゼーション」を支える「ローカル」な文化、文化の多様性を追求することであるため、言ってみれば均質性を求める「グローバリゼーション」と地域化(個別化)を求める「グローカリゼーション」という相反する考え方を同時に行おうとする考え方と言ってもいいかもしれない。<sup>(5)</sup> もともと日本人は対立するもの、あるいは異なるものを同時に受け入れて成立させてきた歴史を持っている。神道・仏教・キリスト教は年中行事や生活習慣という名のもとで見事な共生を見せている。神仏習合という言葉もあるが何の疑問も持たずにその様式や形式が共生して利用されている。七五三ではお宮参り、お彼岸では墓参りし、法事を行う。ウェディング・ドレスを着てチャペルで結婚式を挙げるといった人生上の大イベントもごく当たり前だ。若者にとってクリスマスはクリスチャンでなくてもイベントとして重要なもののひとつになっている。一方、釈迦の誕生会としての花祭りは時期的な問題もあろうが、一般的には釈迦の誕生日として祝うのではなく、花見という名の下でイベント化している。本来の意味合いは希薄になり、外面的なものが独り歩きしている傾向になる。祝日や祭日についてもハッピー・マンディ制度に代表されるように、効率化の中で連休が重視されて来た。東京オリンピック開会式であった10月10日が「体育の日」であったものが2000年から10月2週目の月曜日になるなど、祝日本来の意味が失われる傾向にもある。

## 5 異文化間コミュニケーション

「日本の中の異文化」に注目していく中、世代間による文化受容の差

異に注目してきた。そこでもうひとつのキーワードとして取り上げておくべきものとして「異文化間コミュニケーション」がある。

異文化間コミュニケーション inter-cultural communication  
異なる文化的背景をもった個人、集団、組織の間の意思伝達をさすが、単なる意思の交換だけでなく、人びとの共存や協働を必要とする状況が広まることにより、組織内および組織間のコミュニケーションの機会が増大する。端的には多国籍企業が全世界的に事業を展開するに従って、国籍や民族の異なる人びとの間に、職場内の円滑なコミュニケーション、企業内の部門間および企業間の連絡・調整・交渉が必要になる。コミュニケーションはその手段としての言語だけでなく、生活・行動・思考の様式、価値観や社会意識さらには自我アイデンティティなどのちがいの理解や障壁の克服も重要な課題となる。これらの課題を分析するために1970年代から異文化間心理の研究が盛んになった。また留学やいわゆる海外子女教育、帰国生、在日外国人教育などの問題が社会的に注目され、異文化間教育の研究が進展し、81年に異文化間教育学会が設立された。<sup>(6)</sup>

ここで注目しておきたいのが「生活・行動・思考の様式、価値観や社会意識さらには自我アイデンティティなどのちがいの理解や障壁の克服」（下線は筆者による）である。インターネットの登場によりデジタルネイティブとデジタルイミгранトの間の溝はまさにこの言葉に集約される。新しいものすべてが理想的というものではないが、インターネットの普及状況を見れば、デジタルイミ格蘭トがどのようにインターネットを活用し、SNSに利用していくかは大きな課題とも言える。教育の現場でも学生と教員間、教員間でも世代による違いは顕著である。ここにさらに個人差が生じることは言うまでもないことだ。こうした世代間の相違は日本だけの問題なのかはさておき、森喜郎内閣のIT革命以後、加速度的に進んでいることは間違いのないところだ。かつては自動車の運転免許を保有しているのが当たり前のような時代もあったが、現在は

mail や SNS を活用することが常識的となっていることも時代の流れである。インターネットを活用しての選挙運動が認められたのもこうした背景があるからだ。

## エピローグ

「日本の中の異文化」には日本独特な問題がある一方、どこの国にも共通の問題もある。今回特に注目したのは「世代間における異文化」である。特にインターネットに関わる諸問題は一般の生活に深く係るようになった分、深刻化している。「若者 vs おとな」という構図も今に始まった話ではない。今回の視点は若者文化にしる伝統文化しる、世代間による異文化という捉え方をすれば、理解しやすいことがわかる。先日、授業で“window shopping”を「窓の買い物」と訳したが学生がおり愕然としたが、若者にとって“window shopping”なる言葉はすでに死語に近いのかもしれない。

若者の価値観といわゆるおとなの価値観にはまだまだ隔たりがあるが、孫とコミュニケーションをとるためにスマートホンを使いこなし、SKYPE でテレビ電話を掛けようとする高齢者も珍しくはなくなってきた。同窓会や旅行での写真をインターネット上で共有するシステムも今では当たり前になってきた。これまではおとながマンガ、アニメ等の若者文化を揶揄するような時期もあったが、今ではマンガやアニメもクール・ジャパンという名のもとに国策化され、また、インターネットだけで仕事ができる時代を迎えた。Don Tapscott. *Grown Up Digital: How the Net Generation is Changing Your World* (2009)が出版され、日本でも栗原潔訳『デジタルネイティブが世界を変える』（翔泳社、2009年）とすぐに翻訳本が出版されたが、教育界でもこれまでのような知識付与型の教育に限界があることが指摘されている。デジタルイミгранトの世代も、デジタルネイティブの価値観にも共感を覚えることは多々ある。それは時間に関する価値観である。情報を如何に入手し、その情報をもとに次の行動をどのようにするかが大きなポイントとなる。若者が歌舞伎・能狂言等の伝統芸能に縁遠い理由のひとつにはその費用にも

あるが、劇場内の「時間の流れ」は大きい理由の一つではなかろうか。ゆったりとした時の流れに若者のリズムはマッチしないのである。教育界の話題では体育の中に「ダンス」が入り大きな注目を集めているが、ヒップホップ系のダンスの持つ意味、またそのリズムは本来農耕民族として日本人が持っていたリズムとは全く異なるものだ。

世代間による価値観の相違も大きくなっているのではないだろうか。かつては終身雇用制度・年功序列が日本人の生活観を支えていたが、今やその言葉も幻に近くなっていること、そしてインターネットの登場と普及によりコミュニケーションの方法が大きく変容したことは大きな変革の前触れとも言えよう。リビアやエジプトでは facebook 等により集会等が開催され、内乱に近い状態にまでなったこともすでに報道された通りである。グローバル化が進めば、ローカリゼーションに回帰してくることはこれまでの例からみて明らかであるが、デジタルネイティブが社会を動かす世代にスライドして行くにつれてどのような展開を迎えていくかは予想できないが、デジタルイミгранトの世代が苦戦することには間違いないだろう。今、日本はインターネット文化という新しい文化に対して、特にデジタルイミ格蘭トの世代には大きな転換期を迎えていると言えよう。

## 注

(1) 拙著『『異文化』とは何か—日本異文化研究会の英語表記の一考察』（『日本の中の異文化』第3号、日本異文化研究会、2007年3月）では“UNESCO Declaration on Cultural Diversity”に注目した。

(2) 新村出編『広辞苑』（岩波書店、2008年1月）、p.196。

(3) Marc Prensky. “Digital Natives, Digital Immigrants” はインターネットのPDF公開のものから利用した。

(<http://www.marcprensky.com/writing/prensky%20-%20digital%20natives,%20digital%20immigrants%20-%20part1.pdf#search='digital+++natives%2C+digital+immigrants'>) (2013年6月13日アクセス)

\* Marc Prensky. “Digital Natives, Digital Immigrants” の翻訳は佐々木の試訳を掲載した。

- (4) 浜名恵美『文化と文化をつなぐ』（筑波大学出版会、2012年8月）、p.19.
- (5) 拙著『『伝統文化』とは何か』（『武蔵野学院大学日本総合研究所研究紀要』第6輯、武蔵野学院大学日本総合研究所、2009年3月）、p.5.
- (6) 岩内亮一「異文化間コミュニケーション」（岩内亮一編『国際関係用語辞典』学文社、2003年4月）、p.11.

\* 世代論を扱うには「若者」という言葉は現在、定義が多様化している。小谷敏「拡散する『若者』の定義」

([http://www.social-insight.net/archives/column/column\\_02.html](http://www.social-insight.net/archives/column/column_02.html))

(2013年7月16日アクセス)によれば、以下の通り。

90年代のはじめ頃まで、「若者」とは16歳から24歳までと定義されていた。高校生から大卒で就職して1～2年までの人たち。子供と大人の過渡期にいるのが「若者」だった。しかし、就職氷河期が訪れてフリーターになる若年層が出てくると、「若者」の概念が拡散。フリーター調査では16歳から34歳を「若者」と定義しており、最近では40歳以下が「若者」とまで言われるようになった。

その原因として考えられるのが非正規雇用の増加である。非正規雇用が増えたことによって、「若者時代」の終わりがなくなり、結婚もなかなかしないという状況が生まれ、「若者」の終わりが延びるという結果になった。

また、外国でも自己主張をはっきりとする“Generation Me” created by Twenge (2006)に注目する考え方も無視できるものでない。(Twenge, J. M. *Generation me: Why today's young Americans are more confident, assertive, entitled – and more miserable than ever before*. New York: Free Press, 2006)